

## ハイデルベルク信仰問答講解説教 45 「神のかたちへ」(2012年8月12日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

いかに幸いなことか／神に逆らう者の計らいに従って歩まず／罪ある者の道にとどまらず／傲慢な者と共に座らず、主の教えを愛し／その教えを昼も夜も口ずさむ人。その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び／葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。(詩編1:1-3)

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとはいっていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。(フィリピ3:12-14)

## 【説教】

今日は、信仰問答の第44主日、問113-115のところを手がかりに御言葉に聞いてまいります。ここでは、まず十戒の最後の戒め、第十戒「隣人の家を欲してはならない」について問113で扱います。そして問114、115では、この十戒全体のまとめとして、律法に生きることを意味を説いて、この十戒についての一連の問答を締めくくります。

早速、問113から見ていきましょう。信仰問答は、この最後の第十戒を十戒全体のまとめの戒めとして理解しています。つまり「神の戒めのどれか一つにでも逆らうような」とありますが、それはこれまで見てきた十戒の戒めの一つ一つと理解してもよいのです。それらの戒め一つにでも逆らうような「ほんのささいな欲望や思い」それが「わたしたちの心に入り込ませないようにする」ですから、それはわたしたちの内面の問題、心の中の思いをここで明るみにしています。

当然ながら、わたしたちが何かを行動する時に、ただ体が動くのではなく、その行動を起こさせる原動力となる心があります。それが動機となってわたしたちの体は動きます。信仰問答は、そういう行為の根の部分でここで扱っていると考えてよいでしょう。これまで見てきた戒めは、表面に行動として現れてきます。偶像礼拝、主の名をみだりに唱えること、安息日を守らない、父母を敬わない、殺人、姦淫、盗み、偽証。その行為の根にあるものは一体何か。結局、その元の部分から改めなければ、いくら表面的に戒めを守っているように見えても、それは偽りということになるでしょう。その根本から新しくされなくてはいけない。そうでなければ本当の意味でわたしたちは救われることにはならないのであります。

実際に行為に及ばなければ、心に思うことくらいはよいではないか。多くの人々はそう考えるでしょう。心に思うことまで戒めるとは何と窮屈なことか。しかしこのことは主イエスも厳しく見ておられます。山上の説教の中にこういう主の御言葉があります。「みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである」(マタイ5:28)つまり心の中で思うことが、既にわたしたちの罪を明らかにしているのであって、それが行為に出るか出ないかは実は紙一重のところにある。わたしたちの救いは、表面の行為だけではなく、むしろ人間の内面から新しくされることです。神さまはそこまで見ておられるということです。表面的なことでお茶を濁すようなことではない。なぜ人類は戦争を繰り返すのでしょうか。いじめがなくならないのでしょうか。表面的に戦争しなければよいのか。表面的にいじめなければよいのか。それでは本当の問題は見えてこない。エフェソの信徒への手紙に「以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっていく古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」(4:22-23)とあります。心の底から新たにされる救いが神さまの与える救いなのです。そういう意味で、

この第十戒は、最後の戒めにして、この十戒全体を包括する、根本的な戒めであると理解してよいでしょう。

さて、神さまの戒めに逆らう心とは何でしょう。問113に「ほんのささいな欲望」とありました。第十戒では、「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない」(出エジプト20:17)とあります。そういう隣人のものを欲する心、人のものを見て羨む心。それが問題になっています。「隣人の妻」と聞いて思い起こすのは、サムエル記に、ダビデが自分の部下ウリヤの妻バト・シェバを欲しくなり、ウリヤをわざと戦いの最前線に送り戦死させ、そしてその妻を奪うということをした。欲する思いがそこまでの罪を犯させるのです。ですからこれは単に内面の問題では済まない。欲することが、殺人、姦淫、盗みの罪に及ぶ一つの例です。

「欲する」と訳された言葉は、以前の口語訳聖書では「むさぼる」と訳されました。それは際限なく欲しがることです。満足できない。これは所有欲と言ってもよいでしょう。何かを所有したい強い感情。何かを所有していないと安心できない。満足できない。わたしたちも何か欲しいものがあるとそれがいつまでも頭から離れないという経験があります。それを手に入れないと気が済まない。それはやがて物に対する執着となります。何としても手に入れたい。その時の心はその物に支配されているわけです。ですから聖書ではそういうことを「貪欲」と言い、そしてこの貪欲は偶像礼拝だと言います。真の神さまを見失い、そういう物に支配されているからです。あるいは、そういう貪欲さ、すべてを支配し所有したいという思いが自己神格化を起こすのです。

人はどうしてそのような貪欲さを持つのでしょうか。なぜ際限なく欲しがるのか。それは裏を返せば、自分自身が満たされていないということです。だから何かを所有することで自分が満たされると考える。でもわたしたちの心はそういう物で満たされるものなのでしょうか。ルカによる福音書に「愚かな金持ち」の譬えがあります(12:15-21)。そういうこの世の財産がわたしたちを満たすのではない。聖書はその核心に触れています。つまり「神の前に豊かになる」ということがわたしたちを本当の意味で満たすのです。「神の前に豊かになる」ということは、神さまとの関係が満たされること。それは御前に罪赦されて、神さまとの関係が回復されることに他なりません。そしてその救いはイエス・キリストの十字架と復活の御業によって成し遂げられました。その救いがわたしたちを本当の意味で満たすのであります。

IIコリントに「わたしの恵みはあなたに十分である」(12:9)とあります。この八月から誕生日のカードにこの御言葉を記していますが、これはキリストにおいてこそ言えることです。現実には様々な苦難があるので。パウロもこの時は様々な苦労がありました。「弱さ、侮辱、窮乏、迫害、行き詰まり」それ

でもパウロはキリストのために満足していると言います。それは、その弱さを満たして余あるキリストの命、救いにあずかっているからです。何一つ彼を満たす物はない。しかしその貧しさの中で、彼は御前に回復された恵みを強く感じたのです。このキリストの救いこそが自分を満たすことに気付かされたのです。

どうでしょうか。このキリストの救いがわたしたちを本当の意味でむさぼりから救うのです。何かを所有しなければ気が済まない状態からわたしたちを解放つのです。なぜならもうキリストにおいてわたしたちは満たされているからです。御前に豊かにされているからです。人間がこれ以上に望むことは他にないのです。しかし多くの人々がそこに気付かず、多くの物を所有することが救いであり幸せと考えている。そこでは際限なく欲する思いが、終始満たされない思いがわたしたちを支配するでしょう。しかし信仰は、そこからわたしたちを自由にし、軽やかにし、すべての執着を捨てて生きることを可能にします。キリストの救いこそ完全だからです。もうそれ以上望むものは何もないのです。わたしたちの人生でその部分が満たされていることは決定的ではないでしょうか。ここが満たされている時に、わたしたちは十戒の戒めを心から行うことができる。表面的に体裁を整えるようなものではなく、心の底から新たにされて、神さまのために生きることを喜びとできるのです。

さて、最後に問114-115を見てみましょう。問114では少し驚くようなことが記されています。「神へと立ち返った人たち」というのは、先に述べましたキリストによって御前に豊かにされた人たちのことを言います。彼らは十戒を守るができるか、と問うています。わたしたちは「できます」という答えを期待するのではないのでしょうか。しかしこの信仰問答を書いた人たちはとても正直に、また謙遜に書いています。「最も聖なる人々でさえ、この世にある間は、この服従をわずかにばかり始めたにすぎません」やっとなんか神さまに服従する生活を始めたばかりだ。その一歩を踏み出したにすぎないというのです。少し残念という思いもあるかもしれませんが、わたくしはこの部分に何かほっとするものを感じます。ここに信仰問答の特徴である慰めが出ているように思います。それは人間の罪深さ、弱さを知り尽くしているからです。そこに立つ時に、胸を張って「できます」などとは言えないのです。もし「できます」と言ったならば、やはり自分を強いて生きるようになる。自分に完全を求め、人にも求めるようになるでしょう。そこには守れないことへのいらだちと人を裁く思いに支配されてしまうかもしれません。そういう信仰生活は辛くなります。

でも「最も聖なる人々でさえ」始めたばかり。わたしたちは人を羨むことがあります。信仰的に素晴らしい人を見て、ああゆう人になりたいと思う。そして自分が足りないと思う。それがまたむさぼりの罪を生むでしょう。でもその最も聖なる人々でさえこの服従をわずかにばかり始めたにすぎない。ああ、自分と同じところにある。ずっと先を行っているのではない。それが安心になる。でもただ安心だけではない。そこに安穩としていくわけではない。「真剣な決意をもって」神さまの戒めに生きることを始めた。ここが重要です。信仰問答は、どうせできない。無理と考えて、後ろ向きになっているのではない。ここからようやく真剣に戒めを生きていくことができるようになった。わずかにばかりでも、その一歩を踏み出すかどうか重要なのです。その一歩からすべては始まるのです。その一歩がなければ、何も始まらないのです。

さて、問115ではおもしろい問いが立てられています。これは少しくだけて言えば、そんなできもしない十戒をどうして教えなければならぬのか。自分ができないことを人に教えることができるかということです。それは最もなことでしょう。でも信仰問答はそれでも十戒を繰り返して学ぶ意義があることをここで教えています。問115答にあるように、それはまず罪を知ることです。でも罪を知って暗くなるのではない。だからこそ熱心に救いを求めるようになる。キリストにある罪の赦し

と義を求める。これは十戒の一つの効能です。パウロは律法について「罪の自覚しか生じない」(ローマ3:20)と言います。でもそこがないと人間はキリストの救いを求めません。十戒はその意味で罪を知らせ、悔い改めに導くものであります。

でも同時に、十戒はそこにわたしたちの目標を示します。それが「神のかたち」です。これは創世記に「神にかたどって」人間が造られたという記述があります。それは神さまの栄光を現す存在として本来人間は造られたことを意味しています。しかし罪を犯した人間は、その神さまのかたちから外れてしまいました。神さまの栄光を現すことができなくなったのです。それが十戒を守れないわたしたちの現実を作り出します。でもキリストによって罪赦され、御前に立ち返ったわたしたちは、この十戒を守る生活を始めました。それはあの神さまに造られた時の祝福された人間、神さまの栄光を現す人間として歩み始めたということでもあります。

十戒の戒めは、その神さまのかたちとして生きることがどういうものであるかを示します。それはなおこの世においては完全には守ることができないでしょう。でもここに明確な目標がある。キリストがこの神さまのかたちへとわたしたちを日々新しく回復させてくださるのです。そこに希望をもって、わたしたちは日々前進するのです。

今日はフィリピ書を読みました。これは信仰者の救いに向かう姿勢と勝利に向かって走る競技者を重ね合わせているところから。ロンドンオリンピックが開かれています。目標に向かってひたすら競技に励む選手の姿に感動を覚えます。メダルをとった人たちのインタビューを聞くと、どの選手も高い目標をもって、そこだけを見続けるようにしている。人の評価とか名誉心とか、様々な邪念がまとわりつく。でもそれをはねのけて、ただその目標だけを見て練習に励む。その成果がやがて結果となるのです。

わたしたちも如何にその目標を見失わないように日々前進するかということが求められます。十戒の示す「神のかたち」。目標ははっきりしています。そしてキリストがその完成へと導いてくださいます。あきらめないで目標目指して今日からまた進んでいきましょう。祈りをささげます。